

中国農村地域の家庭における留守児童への性教育

高 晨 表 真 美
(発達教育学研究科) (教育学科教授)

本研究は、中国農村地域における留守児童の家庭での性教育の実態と課題を明らかにすることを目的とする。2025年2月～10月に、中国河北省の農村地域に住む留守児童12名とその保護者10名を対象に、半構造化インタビューを実施した。調査内容は性教育への理解、情報源、期待や課題などであり、質的分析により傾向を整理した。祖父母世代は「恥ずかしいから話さない」、親世代は「必要だが自信がない」と回答する傾向が見られた。保護者が「教えた」と思っているにもかかわらず子どもが「聞いていない」と答える例が多く、伝達のずれが明らかとなった。SNS依存は誤情報リスクを高め、特に男児で知識や対応力の不足が顕著であった。

キーワード：留守児童、家庭、性教育、子ども

1. 研究の背景と目的

(1) 性教育の重要性

アジア太平洋地域を対象とした調査報告書『学ぶ・守る・尊重する・エンパワーする—アジア太平洋地域における包括的性教育の現状(2020年)』では、性教育は単なる生理的知識の伝達にとどまるものではなく、人間関係、価値観や権利、文化とセクシュアリティ、ジェンダー理解、暴力と安全、保護の仕組み、健康とウェルビーイング、生活に必要なスキル、身体と発達、性および性行動、性と生殖に関する健康など、多様な側面を含む包括的な教育であることが示されている「UNESCO(2020)」。

また、国連機関が策定した『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』においては、「セクシュアリティ」は、身体、感情的な愛着や愛、セックス、ジェンダー、ジェンダー・アイデンティティ、性的指向、性的親密さ、快楽および生殖に関する理解と、それら相互の関係性を含む、人間であることの中核を成す概念として位置づけられている。さらに、セクシュアリティは固定的なものではなく、生涯にわたって変化・発展するものであり、そ

の背景には生物学的側面のみならず、社会的、心理的、精神的、宗教的、政治的、法的、歴史的、倫理的、文化的側面が複雑に関係しているとされている「UNESCO(2018)」。

(2) 中国における留守児童の現状

「留守児童」とは、両親もしくは片親が六ヶ月以上農村から都市へ出稼ぎに出ており、子どもが戸籍所在地の農村に残され、両親あるいは片親と六ヶ月以上共同生活を送ることができない十八歳未満の子どもを指す「周(2022)」。

第七次全国人口センサス(七普)の一覧表抽出データによると、2020年時点で全国の0～17歳の児童のうち、留守児童の割合は22.5%、人数としては約6693万人と推計されている(国家統計局、2021)。そのうち農村部に居住する留守児童は62.4%(約4177万人)を占め、都市部の16.9%(約1133万人)、都市周辺部の20.7%(約1383万人)と比較しても、明らかに農村地域に集中していることがわかる。

留守児童は、親が出稼ぎに出ていることから、日常的な監護を祖父母に委ねられている。その結果、十分な見守りが行き届かない状況

が生じる。李は、「監護の実質の不在（以下、監護不在とする）」の状態が、子どもの心理的孤立や不安定を招くだけでなく、性的被害を含む多様なリスクを高める重要な要因であると指摘している「李（2025）」。

実際、近年の複数の研究においても、こうした子どもたちが性的被害に遭いやすいことが報告されている。監護不在、祖父母の高齢化、家庭環境の不安定化に加え、地域社会の見守り機能の低下といった要素が複雑に絡み合う中で、子どもたちは外部からの危険に対して非常に脆弱な立場に置かれている。また、加害者の多くが家族や知人といった「顔見知り」であるケースが見られることや、被害を訴えるための環境や制度的な支援が十分でないことも、問題をより深刻化させている「陳（2025）」。

以上の先行研究および統計データを踏まえると、中国農村地域における留守児童は、家庭内の監護不在や地域社会の見守り機能の低下といった構造的要因のもとで、性的被害のリスクが高い状況に置かれていることが示されている。しかし、数量的データのみでは、留守児童がどのような生活環境の中で被害に至るのかを具体的に把握することは難しい。そこで以下では、報道資料に基づく事例を通して、この点について検討する。

中国農村地域では、留守児童が性的被害に遭う事例が継続的に報告されている。2016年前後に、広西壮族自治区平南県思旺鎮において、父母の双方または一方が長期にわたり都市部へ出稼ぎに出ている家庭に属する留守女児を含む複数の児童が、学校近隣の民間托管施設において、施設管理者から長期間にわたる性的加害行為を受けていた事件が明らかとなった。被害児童の多くは小学生段階にあり、通学距離や生活上の事情から当該施設を日常的に利用していた。

報道によれば、本件における被害児童の多くは、被害当時、性に関する基礎的知識や性的被害に対する予防的理解をほとんど有していなかった。自身が受けていた行為を性的被

害として認識できていなかったとされている。その背景には、父母の長期不在により、家庭内で性に関する話題がほとんど取り上げられていなかったことや、保護者側において性教育の重要性が十分に認識されていなかった実態があったと考えられる「中国新聞網(2018)」。

さらに、中国各地では、留守児童が加害者によって意図的に被害対象として選ばれる事例も確認されている。例えば、寧夏回族自治区靈武市では、幼稚園に勤務していた教員による性的加害事件が発覚している。報道によれば、被害者は計12名の幼女であり、そのうち11名が農村部に暮らす留守児童であったとされている。また、湖南省攸県では、小学校教員が在籍学級内の複数の女子児童に対し、長期間にわたり猥褻行為を行っていた事例が確認されている。報道によれば、当該教員は、父母が出稼ぎに出ている女子児童を主な対象として加害を行っていたとされており、被害児童の多くが日常的な見守りを受けにくい留守児童であった「中国農村留守児童報告『女童之痛』（2016）」。

これらの事例は、家庭外の環境要因が存在することを前提としつつも、親の長期不在や家庭内における性教育の欠如といった家庭構造上の問題が、留守児童を性的被害のリスクにさらしやすい状況と密接に関連していることを示している。とりわけ、家庭において十分な見守りや性に関する基礎的教育が行われていない場合、被害の早期認識や周囲に助けを求める行動が困難となる可能性が高いことが指摘されている。

そのため、家庭における性教育の重要性はこれまで以上に高まっており、保護者が性的被害のリスクを正しく理解し、子どもに必要な知識と対処力を身につけさせることが求められる。

(3) 中国における性教育の現状

1) 教育部(文部科学省)による性教育方針および政策動向

中国における性教育の政策的動向については、近年、未成年者の権利保護および健康保

障の観点から整理されている。『中国児童発展綱要（2021-2030年）』では、子どもに対して正しい性の知識を提供し、健全な性意識や価値観を育成することが明記されており、性教育を基礎教育体系および教育評価の枠組みの中に位置づける方針が示されている。また、保護者や養育者による発達段階に応じた性教育の実施や、性的被害予防教育の重要性についても言及されている。

さらに、中国教育部が公布した『生命安全与健康教育進中小學課程教材指南』（2021）と題する指導文書では、生命安全・健康教育の一部として、青春期の性健康教育および性暴力防止教育が位置づけられている。本指針では、小学校段階から高校段階まで、発達段階に応じて性に関する理解や自己防衛能力を段階的に育成する方針が示されており、性教育を単なる知識伝達にとどめず、心身の発達理解や法的リテラシーなどを含めて扱う点が特徴である。

これらの政策文書から、中国において性教育は、子どもの安全や健康に関わる教育内容として政策上明確に位置づけられていることが読み取れる。

2) 都市・農村地域における性教育実施の差異

中国における性教育の実施状況については、都市部と農村部の間に差異が見られることが、先行研究により報告されている。李海蘭ら（2022）は、小中学校における性教育の現状を整理し、都市部と農村部の間で教材、教員の専門性、教育資源に格差が見られることを報告している。特に農村地域では、性教育が断片的に実施される傾向がある。継続的な教育として定着しにくい点が課題として挙げられている。

また、UNFPAによる中国の若者の性と生殖に関する健康（SRH）に関する報告では、都市・農村間の社会経済条件や教育環境の違いが、若者の情報取得や支援へのアクセスに影響を与える可能性が指摘されている。これらの研究からは、中国における性教育を論じる際に、政策の整備状況だけでなく、地域差

を前提として検討する必要性を示している。

3) 家庭内性教育の普及状況と課題

先に整理した政策的動向を踏まえると、中国における性教育は学校教育の枠組みの中で整備が進められている一方で、家庭もまた重要な役割を担っていることが指摘されている。しかし、先行研究では、家庭内性教育の実施状況には多くの課題が存在することが指摘されている。

李海蘭ら（2022）は、保護者の多くが性教育の必要性を肯定している一方で、具体的な内容や指導方法について十分な知識や自信を持っていない場合が多いことが報告されている。

また、UNFPAの報告によれば、家庭環境が若者の性と生殖に関する健康行動に影響を与える重要な要因であることが示されているが、家庭内で性に関する話題が回避されやすい場合には、子どもが必要な情報を安定的に得ることが難しくなる可能性が指摘されている。これらの研究から、家庭内性教育は重要である一方で、家庭だけにその役割を委ねることには限界があることが示されている。

4) 農村留守児童の性教育の現状

農村地域における留守児童の性教育については、家庭および学校の双方における支援の不足が指摘されている。保護者の出稼ぎによる長期不在により、日常的な養育を祖父母などが担うケースが多く、先行研究では、こうした保護構造が子どもの性教育や相談行動に影響を及ぼす可能性が指摘されている。「李（2025）」

Huら（2023）は、インターネットを用いた性教育プログラムが、青少年の性知識や態度の向上には一定の効果を示す一方で、短期的には性行動そのものへの影響は限定的であると報告している。この結果は、生活環境に制約のある農村地域や留守児童において、知識提供のみでは十分な支援につながらない可能性を示している。

実際、農村地域では、家庭の経済的制約から、保護者や監護者が学業成績を優先し、子

どもの心理的ニーズや性の健康教育が後回しにされやすい。加えて、監護者自身が性健康教育に関する知識や意識を十分に持たない場合も多く、子どもの発達段階に応じた性教育が行われにくい状況がある。さらに、農村社会に性回避的な価値観の影響により、特に留守期間中に子どもを預かる臨時的な保護者において、性に関する教育的対応が困難になりやすいことが指摘されている「郭・林(2020)」。

以上の先行研究から、中国農村地域における留守児童は、父母の長期不在という家庭環境のもとで、家庭内における性教育を十分に受けにくい状況に置かれていることが示されている。これまでの研究では、保護者が性に関する事柄を子どもに十分に伝えられていない状況が指摘されている。また、性的被害に対する理解や対応が不十分さが、子ども自身による被害を認識や、周囲への伝達を困難にしているとされている。

これらの研究を踏まえて、留守児童の性教育を考える際には、家庭構造や日常的な養育生活に着目することが重要であると考えられる。

(4) 研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究では、中国農村地域における留守児童の性教育の現状を調査し、家庭における性教育がどのように展開されているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法と対象

本研究は、中国河北省任丘市周辺の農村地域に居住する留守児童を対象とし、保護者(父母のいずれか、または両親とも)が都市部へ長期的に出稼ぎに出ている家庭において、誰がどのように性教育を担っているのかを明らかにすることとした。調査対象は、留守児童本人およびその保護者から成る10組であり、調査期間は2025年2月から10月までとした。調査方法としては、半構造化インタビューを用い、家庭内における性教育の実態や認識について聞き取りを行った(表1)。

質問項目は以下の項目について行った。

(1) 保護者に対する質問項目

- ①**基本情報**:性別・年齢・最終学歴、子どもとの関係(母親・父親・祖父母)、子どもと現在同居しているか。
- ②**家庭生活と育児**:病気や問題時の対応方法、子どもとのコミュニケーション状況
- ③**性教育に関する意識**:性教育の理解・重要性の認識、性教育を始めるべき年齢の認識、実際に子どもと話した内容と頻度、話すことが難しいと感じる理由。
- ④**情報源と学習意欲**:性教育の情報をどこから得ているか(書籍・動画・インターネット)、性教育研修への参加意欲。
- ⑤**学校教育と社会的支援への期待**:学校での性教育内容に対する評価、インターネット情報への不安、学校・家庭・社会それぞれの役割に対する意見、今後期待する性教育支援や資源。

(2) 子どもに対する質問項目

- ①**基本情報と家庭環境**:年齢・性別・家族構成、両親の仕事と生活状況、誰が日常の世話をしているか。
- ②**家庭での会話と性教育経験**:家族との会話頻度・雰囲気、思春期や身体の変化について話された経験、性や身体の疑問を誰に相談するか
- ③**学校生活と対人関係**:好きな教科とその理由、友人関係といじめ経験、困った時に相談する人の有無。
- ④**学校での性教育経験**:性教育を受けた経験とその内容、授業での印象・役に立ったか、もっと知りたい内容。
- ⑤**性知識の理解レベル**:身体の発達・妊娠・衛生などの知識、不適切な接触への対応認識
- ⑥**性教育への考えと希望**:性教育の必要性への認識、学びたい内容と理想の教育者像、地域活動・社会資源への参加経験と希望。

3. 調査結果

(1) 10 家族に対する調査結果の概要

家族 A では、父母が不在の状況で、祖母 A

中国農村地域の家庭における留守児童への性教育

が主な養育者として思春期にある男児 K と同居していた。家庭内において性に関する話題はほぼ取り上げられておらず、祖母の養育実践は、性や身体変化への対応よりも、日常的な食事管理や生活の世話といった実際的な生活支援に重点が置かれていた。

家族 B は父親が不在の母子同居家庭であり、高校生の男児 L と母親 B が同居していた。母親 B は、性教育は本来家庭の中で家族が担うべきものであると認識していたものの、異性

の子どもを養育する立場から、どのように話題を切り出せばよいのか分からず、具体的な関わりに踏み出せずにいた。そのため、性教育については父親が役割を担うべきだという意識が強く、父親の関与を期待されていることがうかがえた。

家族 C では父親が、母親不在の状況で中学生の女児 M と同居していた。異性の親子関係であることから、性に関する話題に強い距離感があり、

表 1 インタビュー対象者一覧表

インタビュー対象者の居住地：河北省A市のB地域農村で		
知り合った経緯：知人を通じて依頼した		
家庭	インタビュー時間	インタビュー対象者・家庭構成
家庭A	2025年2月5日 午後14時半	祖母A(77歳・小学校卒) K(男・14歳・中学1年生)、 5人(両親・祖父母・本人)・父母長期的に出稼ぎ中、本人は祖父母と同居・一人っ子
家庭B	2025年2月6日 午後16時	母親B(40歳・中学卒業) L(男・16歳・高校一年生)、 3人・本人は母親同居、父親大連で出稼ぎ中
家庭C	2025年2月7日 午後15時半	父親C(38歳・中卒) M(女・15歳・中2生)、 5人・母親は長期的に出稼ぎ中、本人は父親、祖父母と同居
家庭D	2025年2月8日 午後17時	父親D(37歳・中卒) N(男・14歳・中学校二年生)、 3人・本人は父親同居、母親広州で出稼ぎ中
家庭E	2025年2月9日 午後16時40分	母親E(49歳・短期大学) O(女・16歳・高校生)、 3人・本人は母親同居、父親県外出稼ぎ中
家庭F	2025年2月10日 午後13時	母親F(38歳・短大卒業) P(男・15歳・中学二年生)、 3人・本人は母親同居、父親北京で出稼ぎ中
家庭G	2025年2月11日 午後15時半	母親G(40歳・小学校卒業) Q(次女・12歳・小学校6年生)、 4人・長女21歳、現在は母と3人暮らし、父親山東省青島で出稼ぎ
家庭H	2025年2月12日 午後13時	母親H(41歳・専門学校卒業) R(男・13歳・中学1年生) 3人・本人は母親同居、父親北京で出稼ぎ
家庭I	2025年2月23日 午後14時半	母親I(40歳・高校卒業) S(男・10歳・小学4年生)、 3人・本人は母親同居、父親河北省石家荘出稼ぎ
家庭J	2025年2月25日 午前11時	母親J(46歳・中学卒業) T(21歳長女・大学生) U(16歳次女・高校生) V(12歳次男・小学6年生) 5人・現在は母親と子ども三人の四人で同居、父親天津で出稼ぎ

家庭内で性教育がほとんど行われていない状況が確認された。女児 M の身体の変化や性に関わる内容については、主として祖母が対応する、あるいは母親と電話でやり取りする形で補われていた。

家族 D は母親が不在の父子同居家庭であり、中学生の男児 N と父親 D が同居していた。性教育は質問があった場合に限り行われ、内容も身体的特徴に関する説明にとどまるなど、断片的であった。

家族 E では、母親が父親不在の状況で高校

生の女児 O と同居していた。地域での未成年妊娠に関する出来事を契機に、性教育への危機感が高まっていた。家庭内では月経や身体変化など、生活に即した内容が比較的具体的に伝えられていた。

家族 F は父親が不在の母子同居家庭であり、中学生の男児 P と同居していた。母親 F は性教育の必要性は理解していたものの、性に関する話題については抵抗感が強く、自ら説明を行うことは少なかった。とくに、養育しているのが異性の子どもであることから、身体

や性に関わる内容については話題にしづらく、具体的な説明に踏み込めない状態が続いていた。

家族Gでは母親は、父親が不在の状況で小学校高学年の女兒Qと同居していた。性教育は主として危険回避や日常的な注意にとどまり、性や身体について体系的に学ぶ機会はほとんど見られなかった。

家族Hは父親が不在の母子同居家庭であり、中学生の男児Rと同居していた。母親Hは性教育の必要性を比較的高く認識しており、身体変化やプライバシー部位について具体的に説明しようとする姿勢が確認された。

家族Iでは、母親が父親不在の状況で小学生の男児Sと同居していた。保護者は性教育を行っているとは認識していたが、子ども側の記憶や理解は限定的であり、家庭内での説明が性教育として十分に定着していない可能性が示された。

家族Jでは、父親が不在の状況で、母親が3人の子どもを養育しており、子どもの年齢差が大きかった。性に関する関心や理解にも差が見られ、母親は個別対応を意識していたものの、家庭全体として体系的な性教育が行われているとは言い難い状況であった。

（2）保護者の年齢と性別、学歴による分析

本調査では、10家庭の保護者（計10名）に半構造化インタビューを実施した。対象者の年齢・性別・学歴には一定の偏りが見られ、それらが性教育に対する意識や実践態度に関与している様子がうかがえた。

1) 年齢分布の傾向と性教育への関連

保護者の年齢は38～77歳であり、平均年齢は44歳であった。40代が全体の約7割を占めており、子どもが思春期（小学校高学年～高校生）を迎える家庭が多いことを反映していると考えられる。40代の保護者からは、自身が学校で体系的な性教育を受けた経験が乏しいことを背景に、「性の話題」への照れや抵抗感が語られ、それが家庭内での説明の難しさにつながっている例が複数確認された。

一方で、40代後半の一部には、地域におけ

る未成年妊娠や早期交際に関する出来事、あるいは周囲の子どもの成長状況を目にすることを契機として、危機感を抱き、性教育に踏み出す動機となった事例（対象者E、G、J）も確認された。

また、本調査に含まれる祖母世代の保護者においては、「性教育」に対する理解が、主として性行為そのものの説明や禁止に関する指導に限定される傾向が見られた。思春期の身体変化や心理面、人間関係に関する内容については語られることが少なく、「性の話＝性行為の話」という認識が強いことが特徴的であった。このような世代間の理解の差は、家庭内で扱われる性教育の内容や範囲にも影響を与えていると考えられる。

2) 性別と家庭内役割

対象者10名の内訳は、母親7名、父親2名、祖母1名であった。家庭内における養育および教育実践は母親に集中する傾向が強く（対象者B、C、E、F、G、H、I、J）、河北省B地域村における出稼ぎによる「親不在」の家庭構造がその背景にあると考えられる。出稼ぎは父親に偏るケースが多く、結果として家庭内で性教育を担う役割は母親に集まりやすい状況が確認された。

インタビューでは、「本来であれば父親に関わってほしい内容がある」「自分では説明しづらい話題がある」といった語りが複数の母親から聞かれ、性教育を一手に担うことへの心理的負担や葛藤が示された。特に男児に対する性教育については、「女性である自分には限界がある」と感じている母親が多く、父親の不在が教育実践に影響を及ぼしている実態がうかがえた。

一方で、父親の語りからは、娘に対する性教育について強い戸惑いや距離感が示されており、中国社会に根付く「思春期を迎えた子どもに対して、異性の親が過度に関与することを避けるべきだ（女大避父・儿大避母）」といった伝統的な価値観が背景にある可能性が示唆された。異性の親子間では、性に関する話題そのものが避けられやすく、必要性を

感じていても、具体的にどのように伝えればよいのか分からないという状況が見られた。

また、父親が息子に対して関わる場合でも、その内容は男性の身体構造や生理的特徴に関する質問に対し、求められた範囲で答えるにとどまるケースが多く、性に関する価値観や人との関係性といった側面まで踏み込んだ語りはほとんど確認されなかった。さらに、子どもの年齢が上がるにつれて、異性の親子間では性に関する話題をどのように扱えばよいのか分からなくなり、結果として会話自体が避けられる傾向も見られた。

これらの結果から、父親の不在だけでなく、性別役割意識や伝統的な価値観も、家庭内における性教育の担い手や内容に影響を及ぼしている実態が浮かび上がった。

3) 学歴と性教育への影響

最終学歴は、小学校卒 2 名、中学校卒 4 名、高等学校卒 1 名、短期大学卒 2 名、専門学校卒 1 名であった。中学校卒および高等学校卒の保護者では、性教育に対して受動的な姿勢が目立ち、「子どもに聞かれた場合にのみ説明する」「どの段階でどの程度まで話せばよいのか分からない」といった語りが多く見られた。これらの語りからは、性に関する内容を自ら整理し、計画的に子どもへ伝えるという意識が十分に形成されていない状況がうかがえる。

また、「自分自身が子どもの頃に性について学んだ経験がない」「どのような言葉を使えば適切に伝えられるのか分からない」といった発言も複数確認され、知識不足に加え、性に関する事柄を“教える・伝える”ことそのものへの心理的ハードルが、日常的な会話の回避につながっている可能性が示唆された。

一方で、短期大学卒および専門学校卒の保護者では、性教育の必要性を比較的高く認識しており、プライバシー部位、月経、避妊など、具体的かつ実生活に即した内容を子どもに説明している事例が見られた。さらに、動画配信サービスや SNS、児童向け書籍などを参考にしながら、自身の知識を補い、それを

整理・理解した上で子どもに伝えようとする姿勢も確認された。

しかし、すべての対象者の中で、性教育を単なる性行為に関する説明にとどめず、身体の尊重、他者との距離感、自己決定といった広い意味を含むものとして明確に捉えていたのは、母親 E および母親 H の 2 名のみであった。その他の保護者の多くは、性教育を性行為そのもの、あるいはその方法を説明することとして理解しており、性教育の概念は字義的・表層的な理解にとどまっていた。

また、小学校卒の祖母 A および母親 G は、性に関する質問に対して自身の考えを言語化することが難しく、婉曲的な表現を用いたり、話題自体を避けるよう求めたりする場面が見られた。これらの語りからは、学歴の違いが、性に対する捉え方のみならず、性に関する内容を整理し、言葉として子どもに伝える力にも影響を及ぼしている可能性が示唆された。

(3) 子どもの年齢・性別による傾向の分析

本研究では、8～21 歳の留守児童 12 名（男女別）に対してインタビューを行い、年齢層および性別による性教育理解や経験の違いについて整理した。その結果、年齢の上昇に伴い性に関する認識は段階的に変化するものの、いずれの年齢層においても家庭内での体系的な性教育は十分とは言い難い状況が確認された。

1) 子どもの年齢による傾向

① 小学生（8～12 歳、3 名）

小学生の段階では、性や身体変化に関する理解は全体として浅く、プライバシー部位に対する意識も十分に形成されていない場合が多かった。「よく分からない」「考えたことがない」「興味がない」といった反応が複数見られ、性に関する知識や理解はまだ初期的な段階にとどまっていることがうかがえる。

一方で、「知らない人に触られたらどうするか」「危ないときは大人に言う」といった、身の安全に関わる内容については、保護者から断片的に教えられている事例が確認された。ただし、これらの語りは、日常生活の中で必

要に応じて伝えられる注意や約束事の形をとるものが多く、性や身体について体系的に理解を深めるための教育として継続的に行われているとは言い難い。

このことから、小学生段階の留守児童においては、性教育が一貫した学びとして提供されているのではなく、主として危険回避を目的とした断片的な安全指導にとどまっている実態が明らかとなった。

②中学生（13～15歳、5名）

中学生になると、思春期に差し加かることから、身体の変化や男女の違いについて一定の認識が形成されていた。月経や声変わりといった具体的な変化について言及する語りも見られ、性への関心が高まりつつある段階であることがうかがえる。

しかし、避妊や性感染症などの実践的な性知識については、「よく分からない」「聞いたことはあるが詳しく知らない」とする回答が多く、理解は十分とは言い難かった。また、「恥ずかしくて親には聞けない」「インターネットで調べる」といった語りが複数見られ、疑問を抱いた際の主な情報源が家庭外に依存している実態が確認された。家庭内での性教育は限定的であり、学校教育への期待を示す発言が目立った点も特徴的である。

③高校生・大学生（16～21歳、4名）

高校生・大学生の年齢層では、性に関する理解は相対的に進んでおり、恋愛や対人関係についても一定の考えを持っている様子がうかがえた。しかしその一方で、家庭および学校のいずれにおいても、性教育が道徳的・情緒的な説明にとどまり、科学的知識や具体的なリスク対応に関する学習機会が不足していると感じている者が多かった。

特に、性感染症の種類や感染経路、症状といった点については、「きちんと教わった記憶がない」「自分で調べた」とする回答が多く見られた。また、「親とは話しにくい」「姉や友人と話す」といったように、情報獲得が家族以外の身近な他者に依存する傾向も特徴として確認された。

2)子どもの性別による傾向

①女兒（5名）

女兒では、身体変化や月経に対する意識が比較的高く、「母親や姉と話す」といった同性の家族を中心とした相談行動が見られた。一方で、羞恥心やタブー意識が強く、「詳しくは聞けない」「自分から話題にできない」といった抑制的な態度も確認された。

また、「性に関することは学校で教えてほしい」とする発言が多く、家庭内で十分に話し合われていないことを補う場として学校教育に期待を寄せている様子が見えたと。インターネットを通じて情報に触れる機会はあるものの、その信頼性に不安を感じている事例も見られた。

②男児（7名）

男児では、ひげや喉仏、声変わりといった身体的変化への関心は語られたものの、性知識全般や他者との関わり方に関しては、無関心あるいは曖昧な理解にとどまる傾向が見られた。「父親と話すことはない」「学校でも習っていない」といった回答が複数確認され、性教育の空白が相対的に顕著であった。

また、「性について話すのは恥ずかしい」という認識が強く、女兒に比べて相談先や情報入手経路が限られている点が課題として示唆された。

(4)保護者と子どもの回答の相違

保護者と子どもへの個別インタビュー内容を照合した結果、性教育に関する認識や実践内容が一致していない家庭が複数確認された。保護者側の「教えている」という認識と、子ども側の「聞いていない」「覚えていない」という受け止め方の間には、内容理解や記憶の定着、情報の受け取り方において認識の差異が存在していることがうかがえた。以下では、その主な相違点を整理する。

1)「教えたつもり」だが「伝わっていない」ずれ

保護者が「性教育を行った」と述べる一方で、子どもが「聞いたことがない」「分からない」と回答する事例が複数見られた。例えば、母親Ⅰはプライバシー部位や身体変化に

ついて話したと語っているが、子ども S は「まだ習っていない」「知らない」と答えている。このようなズレは、保護者の説明が一時的であったり、抽象的な表現にとどまっていたことなどにより、子どもの理解や記憶に十分に残っていない可能性を示している。

また、保護者が「伝えた」という行為そのものを重視しているのに対し、子ども側は「理解できたか」「自分の中で整理できたか」という観点で受け止めている点も、認識の不一致につながっていると考えられる。

2) 保護者の実践意識と子どもの記憶の差

「学校では十分に教えてくれないため、自分が教える必要がある」と語る保護者がいる一方で、子ども側は「学校で習った」という記憶を中心に学習経験を捉えている事例が確認された。家庭における性教育は全体として普及度が低く、日常的に話題として取り上げられる機会は極めて少なかった。

多くの場合、性に関する話題は、子どもが自ら疑問を持って質問したとき、あるいは子どもが特に質問しない場合でも、保護者が何らかの問題や変化に気づいた際に取り上げられていた。その際、保護者は状況に応じて、性に関する断片的な情報や行動上の注意を子どもに伝える形で対応しており、体系的に教えられることは少なかった。

そのため、保護者は状況に応じて対応せざるを得ず、「答える」「説明する」といった形で受動的に性教育を行っている様子が見られた。

また、保護者から提供される情報は断片的であり、その内容も主として男女の身体的特徴や思春期における生理的変化に関する説明に集中していた。このような家庭性教育は、実施される回数自体が少ないうえ、一回ごとの内容も限定的であるため、子どもにとってはそれが「性教育」として明確に認識されにくく、記憶に残りにくい状況が生じていると考えられる。

その結果、家庭内で性教育が行われたかどうかについて、子どもと保護者との間で記憶

や捉え方に差が生じている実態が確認された。

3) 社会的期待バイアスの可能性

一部の保護者は、「きちんと教えている」「子どもは理解している」と比較的肯定的に回答していたが、子ども側は「よく分からない」「そんな話はしていない」と率直に語っており、両者の認識にはずれが見られた。

このようなずれが生じる背景には、複数の要因が並行して存在していると考えられる。一つには、調査者や外部に対して、責任ある親としての姿を示したいという意識が働き、回答をできるだけ整ったものにしようとする傾向がある点が挙げられる。

同時に、もう一つの要因として、保護者自身が性教育とは何かを十分に理解していない状況が挙げられる。多くの保護者は、性教育を男女の身体的な違いや思春期における生理的変化に関する説明として捉えており、それ以外の内容については明確な認識を持っていなかった。また、女性である保護者の中にも、自身の身体構造や生理に関する理解が断片的にとどまっている事例が確認された。

このように、外部からの視線を意識する姿勢と、性や身体に関する自己理解の不足という二つの要因が重なり合うことで、性教育の実践について実際以上に整った形で語られる状況が生じている可能性が示唆される。

4) 情報源の不一致とリスク

保護者は「性教育は親が教えるのが望ましい」「家庭で伝えるべきだ」と捉える傾向がある一方で、子どもはインターネットや友人、兄姉といった家庭外の情報源から断片的に知識を得ている実態が確認された。このように、保護者が想定する主な情報源と、子どもが実際に利用している情報源との間には明確な認識の差異が存在している。

さらに、保護者が「まだ早い」「必要になったら教える」と判断している間にも、子どもは日常生活やメディアを通じて性に関する情報に接しており、疑問や関心が先行して生じている場合が少なかった。その結果、信頼性の低い情報や誤った知識を無批判に受

け入れてしまうリスクが高まる可能性がある。

（5）考察

本研究のインタビューから、農村の留守家庭においては、家庭のみで思春期の性教育を十分に担うことが難しい実態が明らかになった。祖父母世代には「成長すれば自然に分かる」という認識が根強く、母親世代においても、必要性は理解しているものの、知識不足や羞恥心から具体的な説明に踏み込めないケースが多く見られた。父親の長期不在により、性教育の役割が母親や祖父母に集中している点も、家庭内教育の限界を強めている。

こうした状況は、先行研究で指摘されてきた中国農村部の家庭性教育の特徴とも一致している。UNFPA や中国教育部の報告においても、農村地域では保護者自身が体系的な性教育を受ける機会が少なく、性教育を「話しにくいもの」「学校に任せるべきもの」と捉える傾向が示されている。家庭の重要性が強調される一方で、保護者の知識や指導力の差が、実践を困難にしている点は、本研究の結果からも裏づけられた。

一方、保護者は学校に対して一定の期待を寄せており、「学校と家庭で役割を分担したい」という認識が共有されていた。しかし、実際の学校教育では、性教育が衛生・エイズ予防に限られることが多く、思春期の身体変化や人間関係、性的被害予防といった内容は十分に扱われていない。保護者の期待と学校教育の現状との間に生じているこの認識の差異が、家庭で性教育を担う不安や負担感をさらに強めていると考えられる。

また、子ども側は性に関する情報を主にインターネットや SNS から得ており、家庭や学校での学びの不足を補う役割を果たしている。しかし、その多くは断片的で、情報の正確性を自分で判断せざるを得ない状況にある。保護者も誤情報への不安を抱いているが、家庭や学校が代替となる学習の場を十分に提供できていないため、子どもがオンライン情報に依存せざるを得ない構造が生じている。

実際に、中国青少年研究中心（2023）の調

査によれば、現在の青少年にとって、インターネットは日常生活の中で最も身近な情報取得手段となっており、性に関する情報についても、家庭や学校より先に、検索エンジンや SNS、動画配信サービスなどを通じて接触するケースが多いことが示されている。このような情報環境の中では、正確性や信頼性が十分に担保されていない情報にも容易に触れる可能性が高い。

特に、家庭内での見守りや日常的な対話が不足しがちな留守児童においては、インターネット利用に対する大人の関与が相対的に弱く、性に関する情報を自ら取捨選択せざるを得ない状況に置かれていることが指摘されている。その結果、断片的で偏った情報や不適切な内容を、十分な理解や批判的判断を伴わないまま受け入れてしまうリスクが、より高まりやすい状況にあると考えられる。

性的被害予防の観点から見ても、家庭のみでの対応には限界がある。子どもは危険を感じた際の行動イメージを持っているものの、セクシュアル・ハラスメントの判断基準や相談先については理解が不十分であった。保護者も注意喚起の必要性を感じながら、具体的な指導を先送りにする傾向が見られ、予防教育が家庭ごとの判断に委ねられている現状がうかがえた。

以上の結果から、留守児童の性教育を家庭内の努力にのみ依存することには限界があり、学校を中心に、地域や社会が関与する多層的な支援体制の構築が不可欠であると考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究は、中国河北省任丘市周辺の農村地域を対象に、留守児童を育てる家庭における性教育の実態と課題を、保護者および子どもへのインタビューを通して明らかにすることを目的とした。インタビュー調査の結果、留守家庭における性教育は、保護者の世代差や性別役割意識、知識不足、羞恥感などの影響を受け、体系的に行われていないことが明ら

かになった。父親の長期不在により、性教育の役割が母親や祖父母に集中している点も、家庭内教育の限界を強めていた。学校における性教育について、内容が限定的であるとの指摘も見られ、家庭の役割との関係については検討の余地が残されている。その結果、子どもはインターネットや SNS を主要な情報源としながら、自分なりに性に関する理解を形成しており、情報の正確性や安全性の面でリスクを抱えていることが示唆された。また、保護者が「教えている」と認識している内容が、子どもには十分に伝わっていないケースも多く、両者の認識の差異が確認された。

以上より、留守児童の性教育を家庭内の問題としてのみ捉えるのではなく、学校・地域・社会が連携して支える仕組みを整える必要性が示された。本研究は一地域を対象とした調査であり、結果の一般化には限界があるが、農村地域における留守児童の性教育の課題を、当事者の具体的な語りから明らかにした点に意義があると考えられる。

今後は、今回の調査結果を踏まえて、保護者への支援や学習機会の充実を通じて、家庭内での性教育の質をどのように高めていくかを検討したい。

文献

- 陳 愛武 (2025)。「完善農村留守児童監護体系研究」『人民論壇』2025 (2)、51-55。
- 国家统计局 (2021)。「第七次全国人口普查公报」。国家统计局。
- 郭 怡新・林 芸竹 (2020)。「浅谈我国农村留守儿童性健康教育」『心理月刊』15 (17)、222-224。
- Hu, Z., Chen, X., Li, Y., Wang, H., & Zhang, L. (2023). Effects of sexuality education on sexual knowledge, sexual attitudes, and sexual behaviors of youths in China: A cluster-randomized controlled trial. *Journal of Adolescent Health*, 72 (4), 607-615。
- 李 春玲 (2025)。「留守児童受侵害問題有效防治策略」『人民論壇』2025 (2)、46-50。
- 李 海蘭・羅 毓儀・楊 慧傑・吳 忠旺 (2022)。「中小學性教育現狀與對策思考」『中國學校衛生』43 (7)、965-969。
- 呂 利丹 (2024)。「中國農村留守兒童的最新狀況和變動趨勢—2010~2020年」『人口研究』48 (1)、1-13。
- UNESCO (2018)。International Technical Guidance on Sexuality Education: An Evidence-Informed Approach。Paris: UNESCO。
- UNESCO (2020)。学ぶ・守る・尊重する・エンパワーする——アジア太平洋地域における包括的性教育の現状。Paris: UNESCO。
- UNFPA・UNESCO (2022)。全面性教育技術指南——國際標準在中國的潛在本土化應用。北京: UNFPA China。
- 新華網 (2016年11月23日)。「中國農村留守兒童報告：女童之痛」http://www.xinhuanet.com/politics/2016-11/23/c_129374729_4.htm (閲覧日: 2025年10月5日)。
- 中國青少年研究中心 (2023)。「中國青少年互聯網使用及網絡素養狀況調查報告 (2023)」中國青少年研究中心。
- 中國新聞網 (2018年1月15日)。「留守兒童に関する社会事件報道」<https://www.chinanews.com.cn/m/sh/2018/01-15/8423935.shtml> (閲覧日: 2025年10月5日)。
- 中華人民共和國國務院 (2021)。「中國兒童發展綱要 (2021-2030年)」。北京: 中華人民共和國國務院。
- 中華人民共和國教育部 (2021)。「生命安全与健康教育進中小學課程教材指南」北京: 教育部。
- 周 亜芸 (2022)。「中國農村社会的變化が留守兒童に与える影響——元留守兒童と現留守兒童の語りを通して」『華南研究』8、37-54。

付記

本研究は、京都女子大学臨床研究倫理審査

委員会の審査を受け、承認された（受付番号：
2024-35）。